

2022. 7. 3. 主日礼拝説教
聖書： マルコによる福音書 15 章 33～41 節
『心の距離』

「福音書」と後に名付けられた「イエスに関する覚え書き」を最初にしたためたマルコは、いよいよ本日の箇所を以て十字架のくだり、つまりイエスの死を描き出そうと致します。

すでにマルコの時代、各教会や巷には、まことしやかに語り継がれる十字架に関する伝承が、今となっては失われてしまったものを含めると星の数ほどあったようです。そしてその多くが十字架の出来事を誉め謳い上げる英雄譚か茶化した道化話でした。

そういった伝承に囲まれて、マルコはそれらの中から取捨選択を繰り返しつつ「イエスの死」とは「私」にとって何だったのかという迫りを身に負いながら言葉を紡ぎ出してゆきました。

それは「イエスの死」と「私」の間に「距離」があってはならないという厳然たる決意がマルコの筆致からうかがい知れるのです。十字架の出来事とは遠い昔の語りごとではなく、今を生きる「私」と「あなた」の物語であることをマルコは群がる伝承を押しつけて、ここにイエスの死を再解釈したのです。

当時の社会は娯楽のほとんど無い社会でした。娯楽とはある意味、至高の情報です。時の為政者は民衆のコントロールとガス抜きのために娯楽を用いました。ローマ帝国のコロセウムでの剣闘士の闘いやキリスト教徒の殺戮がヒット商品であったことは私たちの知るところです。それらは現代では内乱のない富裕国家の隅々まで行き渡るテレビやパソコンに携帯といった端末の娯楽情報に置き換えられているに過ぎません。

イエスはゴルゴタという高台で十字架に架けられました。なぜ高台だったかというと周りから良く観えるためです。つまり刑場とは娯楽の殿堂だったのです。これは近代まで続きました。ロンドン塔やパリの刑場は有名な観光名所で、マリー・アントワネットの処刑日には数万人の立ち見が出来た程だったといえます。定められた処刑日には屋台が立ち並び、家族総出で弁当を持参し朝から晩まで楽しんだそうです。

イエスの時代も規模の大小はあれ、似たようなものだったと思われます。36 節に登場するような道化の茶化しも時間のかかる十字架刑を盛り上げるため

の演出だったのでしょう。

マルコはこのような多数派、つまり律法を神とする既存ユダヤ教の原理主義に対して「神殿の垂れ幕が上から下まで真っ二つに裂けた」(38)と記して断罪します。彼らは自らが真理と定めたものを批判する者は排除してもよいと考えたのです。

そんな主義主張に対してマルコは極めて少数派を擁護するというリベラルな立場を選択しました。少数の中に新しい真理を共に見出そうとしたのです。それは百人隊長と女性たちでした。片やローマ兵としてユダヤの憎しみの対象であり、片や人権の認められなかった存在です。しかし、この兩人を通して「神の子」告白と寄り添いが宣言されたのです。

神理解を律法という固定化された考えから、たとえ流動的であれ生きる人間の手に取り戻した瞬間です。ここにイエスの十字架の意味が明らかにされたのです。

主イエスの十字架の周りには多くの人々が取り巻いていました。その距離は心の距離ではなかったでしょうか。

その距離をイエスの側から縮められる出来事が十字架なのです。